

はじめに

米国ロス郊外にあるC I W (California Institution for Women) から手づくりのカードを受け取りました。C I Wは一九五二年に設立された女性対象の刑務所です。ここで選択理論を学ぶ受刑者が目覚ましく変化をしているのです。

私と妻・寿美江は二〇一〇年一月二二日にC I Wを訪問して、直接、選択理論の影響を観察させてもらいました。今回の手紙は寄せ書きで、入院している妻のため「早くよくなって」という励ましのカードでした。

直接会って話をした受刑者は二十数人程度でした。彼女らはライフター(終身刑)と呼ばれる人々で、自分は二九年ここで生活しているとか、自分は二一年とか、話をしてくれました。選択理論に触れて、「自分の行動は自分の選択である」ことを確認し、それが人生に大きな変化をもたらしていると口々に分かちあってくれました。

受け取ったカードの表紙には、妻が受刑者の話を聞き終えて感想を述べている写

真が刷り込まれ、その下に妻の名前、その下に「勇気、思いやり、献身、結びつき、選択」という言葉が書かれていました。表紙をめくると、妻への励ましの言葉が自筆でいっぱい書かれていて、その数は八〇人。そして最後のページには You are in our thoughts, hearts and prayers. (あなたのことを覚えています。そして、祈っています)と書かれていました。

八〇人の中には会ったことのない人たちもいました。その人たちは、私たちが訪問した日のDVDを見たか、私たちの話を人から聞いて、カードにメッセージを書いてくれたのだと思います。選択理論を学びたい人だけが集まる夜のクラスには、八四名が参加していると聞いていましたので、ほとんど全員が書いてくれたことになりました。

メッセージは温かさに溢れていました。犯罪を犯した人たちが、ここまで優しさを表現できるようになっていることは驚きです。また、選択理論の講座を受講する人の順番待ちの人数が日ごとに増えていて、順番待ちリストには一六七人もの名前が載っていると聞きました。そして特筆すべきは、選択理論を学んで出所した人が、ここ三年間で一度も刑務所に戻っていないということです。通常の再犯率は六〇％と言われています。選択理論を学んだ受刑者の三年後の再犯率は〇％なのです。

ところで本書は学校に関するものです。

刑務所で人が変わるなら、学校で人が変わらないはずはありません。選択理論を学校や家庭で実践し、それを児童や生徒が学べば、この刑務所で起こっていることに匹敵することが起こるのではないのでしょうか。私はCIWで起こっていることをこの目で見ても、私自身、選択理論にもっと自信を持っていいと確信しました。

本書は第一部で井上千代先生がご自身の実践を踏まえて「選択理論の基礎と学校での活用」を執筆しました。そして、私（柿谷正期）は第二部で「クオリティ・スクールを実現する五つの教育理念」と題して執筆しました。二人が同様のことを述べている部分がありますが、それは重要なところだと理解してください。

選択理論が多くの学校で実践されることを願いつつ。

二〇一一年二月二〇日

柿谷 正期